ヘンリー・フォールズ
『ニッポン（Nipon）滞在の9年間
-日本の生活と仕来りの概観-』（第2章）

メタデータ	言語: jpn
	出版者: 明治大学教養論集刊行会
	公開日: 2017-05-31
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 長尾, 史郎, 高畑, 美代子
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/18700

明治大学教養論集　通巻523号
（2017・1）pp. 211-225

ヘンリー・フォールズ『ニッポン(Nipon)滞在の9年間 ── 日本の生活と仕来りの概観』〔第2章〕

長　尾　史　郎
高　畑　美代子

第2章　横浜の第一印象

淡い黄色のバナナ ── まるで蜂蜜とマッシュポテト(mealy potatoe)を混ぜ合わせたみたいだ ── や，青緑の葉の付きのジューシーなパイナップル ── びっしりついた桃色の花が[1]，やがて先がルビー色になった金色の硬いうろこ状になって覆う ── を喉がカラカラになった我々旅行者はシンガポールと香港の山積みされた店で買いだめした。その商店の日除け(awning)の下の長く垂れ下がった歓迎の花綱(festoon)も徐々に色あせて，香港は夏の熱帯の甘美な眺めのように消えて行った。

今まで，一両日，弛(たゆ)みなく蒸気船で暗い黄色の海を進んできた。この色は，その響きの良い流れ ── 揚子江(Yang-tsze-keang) ── の泥を含んだ水によるということだ。男性旅行者は白い麻の上着を脱ぎ棄て，今では全員が ── 青鼻(blue nose)たちと赤耳(red ear)たち[2]を除く ──，黴臭いトランクから引っ張り出した一番厚手のコートや

1

〔http://art3.photozou.jp/pub/47〕

2　「ブルー・ノウズ」は清教徒，特に厳格な清教徒のあだ名に用いられるが，ここは単に寒さで鼻や耳が色変わりした様を言うようだ。

マントに包まっている。と言うのは，2月の末(すえ)のこの寒い朝方に日々デッキの清掃が行われるが，ホースから出た塩水があっという間に磨かれたデッキの厚板上で硬く氷結し，朝の散歩時(どき)には滑り易くなっているほどなのだ。私たちはとうとう，日本の緯度にやってきた。2月間の退屈な長旅(ビルグリム)の後，さらに二日かばかりの侘しい旅の後で，あんなにも憧れ何度も夢見た日本，この国を生涯，誰もが，間違いなく一人ひとりの心に抱き続けるにちがいない！

私たちはV型のコースを取ったが[3]，その頂点(angle)はほとんど赤道に達し，60日という短い期間で，二回以上，寒暖計が示し得るあらゆる変化を全て経験した。

3月3日に硫黄島(Iwoga shima)[4]（shimaは島の意）を右側(starboard side)に見て通過した――活火山で，黒褐色の山腹を縫い合わせたような色々な割れ目から活発に煙を吐き出していた。夜にはこの山は経費のかからない一級灯台と化す。主峰は図版では2,469フィート［約752 m］と書かれているが，しかし実際には恐らくもっと低いのでは，と私は思ったが，もちろん，活火山の場合には，これまでの観察者たちが不正確だったということでは全くない。

遠距離と陸側の空気に漂う靄(もや)とが相俟ってぼんやりとかすみ，淡黄褐色の山々が明るい緑を貼り付けた夢のような眺めがあった。それこそがついに目指し待ち望んだ大地だということが分かった。大きくて活気に満ちた江戸湾に入ったとき，厚い靄(もや)があらゆるものを覆っていて，何もかも白っぽい灰色に溶け合っていた。我船は灯台に挨拶を送った。灯台はただちに近づいてくる訪問者に俊敏に前進する文明の印を与える。艦上に水先案内人が乗り込ん

3　前章では“U”と表現している。

4　硫黄島。Satsuma-Iojima. 常時観測火山. 北緯30°47′35″ 東経130°18′19″ 標高704 m（硫黄岳）（三角点・硫黄島）。山頂火口では噴気活動が活発である。（気象庁ホームページ）

できて，やがて横浜港へと白帆のジャンク，サンパンつまり小さな手漕ぎの船団の間を縫って静々と進んで行った。中国のものとは異なり，それらは普通，塗装していないので，すぐに分かったのだが，この恐るべき塗装嫌いは，そのまま旧弊な日本人にとってはほとんど信仰とも言うべき信条なのだ。だがそれについてはまたの機会にしよう。しかしながら，現代精神は ── 日本では常に極めて「美的」というわけにはいかない ── ペンキを盛大に浪費し，家屋や家具に塗りたくるので，量も種類もほとんど品薄の状態だ。

清国人（chinaman）は自分のサンパンの船首にパッチリした目[5]を描くのが大好きで，お決まりの冗談は，詮索好きのよそ者に対して単純かつ明快に，「目ン玉無（no got）けりゃ見えっこない（eye no can see）」で，さらに，孔子とその弟子たちが熱心に愛した進歩的な説得法（レトリック）[6]を用いて落ち着き払って，［ピジン英語で］こう付け加える ──

5

［https://www.google.co.jp/search?q=eye+painted+++sanpan,&hl=ja&rlz=1T4GGLL_jaJP393JP394&tbm=isch&tbo=u&source=univ&sa=X&ved=0ahUKEwia09zglL_JAhUKGpQKHWTJATwQsAQIOg& biw=1120&bih=577&dpr=1.5］

6 孔子の修辞について，以下の二面について触れておく ──

① 巧言令色，鮮（すく）なし仁。（巧言令色鮮矣仁。）（「論語」学而篇・陽貨篇）に代表される思想 ──

［白文］5. 或曰，雍也仁而不佞，子曰，焉用佞，禦人以口給，屢憎於人，不知其仁也，焉用佞。［書き下し文］或るひと曰く，雍（よう）は仁にして佞（ねい）ならず。子曰く，焉（いずく）んぞ佞を用いん，人を禦（ふせ）ぐに口給（こうきゅう）を以てすれば，しばしば（屢）人に憎まる。その仁を知らず，焉んぞ佞を用いん。［解説］孔子は，巧言令色の弁士を好まなかったように，弁舌爽やかな修辞（表現技法）を用いて巧みに人を言いくるめようとする人間を信用しなかったようである。ある人が，自分の家臣である雍（よう）の口下手なところを嘆いて孔子に相談すると，孔子は『弁舌が過度に達者であると人から恨まれやすくなるだけだから，仁者となるのに必ずしも雄弁である必要はない』と諭したのである。［http://www5f.biglobe.ne.jp/~mind/knowledge/classic/rongo005.html］

② ［孔子に］目立つのは，中国古来からの伝統的な手法である対句を多用していることである。対句は語格，文構造が同じか，類似する2つの文言を並置・対応して対照，対比，強調の表現効果を狙う技法である。文言の長さや音韻も対応させると効果がいっそう上がる。── ［例］ 里仁四，21；邦に道あれば則ち知，邦に道なければ則ち愚。［http://12949602.at.webry.info/200803/article_8.html］

「見えないと行けないね（no can see no can go）」と。ところで，妙なことに，エジプト人も遥か昔に同じような目 ── ホルス［天空神“ホルスの眼”］[7] ── を同じくガレー船の船首に描いていた。日本ではしかしながら，目の代わりに ── 私は一度も見たことはないのだが ── 大抵は船首に，動物学上創意工夫に富んだウナギともヘビともつかないものが赤で描かれている。たいていは船首に，塗料でなぞったものが付いているだけのようだ。

投錨予定場所に近接するにつれ，幾艘かの小舟が，まるで何か磁力ででもこちらに引き寄せられてくるように急ぐのが遠くに見えた。水飛沫（しぶき）が上がり，獲物の分け合いを呼びかける叫び声で，まるで禿鷹が座礁した鯨目がけて急降下しているようだ。

水夫たちはすばらしく敏活で，怒り肩（square-shouldered），踏ん張った小柄な男らの手足は筋張っている。原則として，私が思っていたよりは黄褐色でなかった ── なかにはかなり浅黒い肌の者もいたが。彼らの身体はダマスカス様の，二色かそうでなければ多分三色の入れ墨を彫り込んである以外は他にほとんど身に纏っていなかったので，筋肉の発達度を判断するちょうど良い機会だった。日本人は，概して他の東洋の諸種族のように，風雅にみせる長所を身につけていない。男も女も，インドやアラブの諸種族が西洋人の想像力を掻き立てるあの微妙な優美さも印象的な挙措（きょそ）もない。もちろん，このざっと見たところにもいろいろ例外があるが，しかしもう一度，他の諸種族を見，研究した

7

ホルス（Horus，エジプト語ラテン文字転写：Hr, Hru，古代ギリシア語：Ωρος, Höros）の左目は「ウジャト（ウアジェト）の目」で月の象徴となり［右目は太陽の象徴］，魔除けとして描かれた。『死者の書』では葬送船の船首に描かれた。写真はセピの棺（紀元前 1900-1795）に描かれたヒエログラフの一部。*BOOK OF EGYYPTIAN HIEROGLYPHS* p. 47. The British Museum Press.

後では，最初に形成したこの印象がますます強くなった。奇怪でユーモラスな人体の描写と，動物にその形態を反映させた類似性は，当然のことながら自然と，人間との関係における日本美術の傾向になるのは自ずと明らかである。この分野において，これに際立って優るものはなかった[8]。

横浜は，確かに，── 日曜日に着いたのだが ── それ自体，取り立てて言うほどの場所でない。低湿地で，幅広の浅い潮汐運河(tidal canals)[9]と直角に至る所に堀が張られていて，濃縮された亜熱帯の汚水の抽出物で溢れている。海が，それを毎日二回，控えめながら［潮の満ち引きで］最善を尽くして，我慢できるくらいに溶かし出し公共事業機関の援助をしている。また，至る所に架かっている木の橋は塗装していないので，余り長持ちしそうもない。雑草のように急速成長する町。ぎっしりと建て込んだ商館(hongs)や倉庫，何軒かの本当に立派で充実(well-stored)した西洋の商店，一二の良いホテル，保証された土地の地所と免税店，税関所，銀行，海運会社，悪酔いしそうな安酒場，二つの立派な建物の教会，清国人両替商の小店，趣味の良い美麗な庭付きの平屋(bungalow)，下層民(riff-raff)の下宿屋，広大な鉄道駅舎，あらゆる国々からの船団全部に十分間に合う停泊場がある。そして何にもまして富士山は，今雪の短白衣(サープリス)[10]を纏ってまるで神の祭壇の前に立つ荘厳な牧師のように輝いている。

外人用邸宅（極めて居心地よく趣味の良い）が海に面した「崖(bluff)」の上に建てられている。古代の海岸線の印を刻んだ緩やかに起伏する豊かな高台の縁を波が侵食し，多数のコテイジや住宅(ヴィラ)を建てる快適で許容できる健康的な場所となっている。建造されたのは「条約港(treaty ports)」の外国人居留民と居留地の保護・防御の必要があり，軍隊が駐屯し始めた時，また外国貿易が今よりはるかに良好で見込みがあると考えられていた頃だった[11]。庭園は眺めているだ

---

8 『鳥獣戯画』ないし『北斎漫画』か何かへの言及か？

9 潮の満ち引きの影響で水位や流速が変化する河川や運河の流域を感潮区間という。横浜では明治3年根岸湾から運河が引かれた。

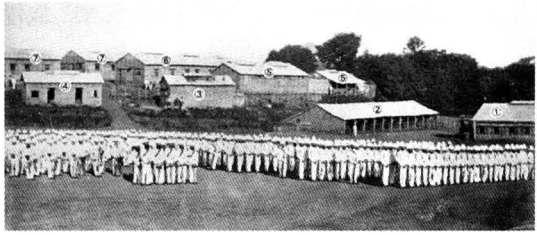
10 英国教会やカトリック教会で聖職者が cassock の上に着る袖の広い短い白衣。

11 1863（文久3）～1875（明治5）年にかけて横浜山手に英仏軍が駐屯していた。1862年の生麦事件を受けて外国人居留地の保護と防衛を目的にイギリスが軍

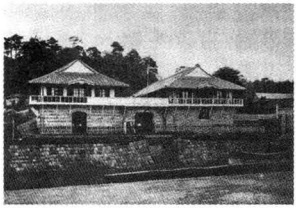
用地として借りていた高台（山手）の南側に1863年イギリスとフランスの軍の駐留を認め，この年フランス軍の駐屯が始まった。翌年イギリス陸軍の駐屯が始まり，1875（明治8）年の両軍撤退まで，英仏軍が山手に駐屯した。フォールズの来日した1874（明治7）年には1871年のイギリス軍が大幅削減に応じた後で，その翌年には撤退しているので，彼がつぶさに見たのは駐屯地の跡地であろう。

開港資料館『開港の広場』107に「最後の陸軍部隊，第10連隊の威容」として以下の写真が紹介されている。

「横浜，南陣営のイギリス第10連隊第1大隊」1868〜71年撮影。イギリス，ミュージアム・オブ・リンカンシャー・ライフ所蔵 ── ①厩，②大砲置き場，③炊事場，④浴室小屋，⑤憲兵詰所と営倉，⑥酒保と娯楽室，⑦一般独身兵用兵舎。②大砲。



横浜開港資料館 『開港の広場』107号2010（平成22）年1月27日より ── 閲兵場に居並ぶ大隊左手にはチューバやホルン，トランペットなどの楽器を手にした軍楽隊の姿がある。率いたのは，「君が代」の最初の作者として知られ，薩摩（鹿児島）藩兵にも軍楽を指導したフェントンであった。（前掲書）



［フランス駐屯所 ── John Reddie Black ― 日本の美術 No. 446, p. 25（オリジナルは The Far East 掲載の写真）［https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8B%B1%E4%BB%8F%E6%A8%AA%E6%B5%9C%E9%A7%90%E5%B1%AF%E8%BB%8D］

［http://4travel.jp/travelogue/10729716］

現況 ── 英仏駐屯地跡（みなとの見える丘公園）のブラフ。草に覆われて地層は見えない。（訳者撮影）

けで楽しく，ここには多くの植物が何気なく生えているが，英国諸島では極めて珍しいものだ。崖（ブラフ）［山手］からは日本人の町が好もしく眺められるが，崖下の湿地を埋め立てたもので，それらもやはり全体を高台の外縁 ── この同じ崖を形成する ── で囲まれているのがわかる。

賑わう波止場を見渡せば，絶えず動いている小舟に点綴（てんてい）され，それに交じって様々な旗を掲（かか）げた装甲艦（ironclad），最大級の貨物船（cargo），蒸気客船，帆船がたくさん浮かんでいる。湾を縁取ってきっちりした幾何学的曲線を描いて東京鉄道が走り[12]，水路（channel）の中心は大きな翼（white-winged）の白いジャンクが群れて，ゆっくりと順風を受けてミ

12

梅堂国政*画　横浜鉄道蒸気出車之図　3枚続（訳者保有）── http://kiritsubo.jp/item/uki-06.html］

*三代目　歌川国貞（嘉永元（1848年）-大正9（1920））── 江戸時代末期から明治時代にかけての浮世絵師。／三代目歌川豊国及び四代目歌川豊国の門人。姓は竹内（母方），幼名は朝太郎，名は栄久。梅堂，香朝楼，一寿斎，梅堂豊斎，芳斎と号す。江戸日本橋の生まれ。父は大阪屋栄次郎（杵屋貞山），母は堀利熙の藩士の娘で姓を竹内といった。安政5年（1858年），三代目豊国に入門し，**梅堂国政・一寿斎国政（四代目歌川国政）**と称した。三代目豊国の没後，二代目歌川国貞（四代目豊国）に学ぶ。明治22年（1889年）に三代目として国貞の名を継ぎ，香蝶楼と号す。さらに明治24年（1891年）以降，豊斎と号した。主に文明開化絵や役者絵を描き，初代市川左團次の似顔絵を得意としていた。風俗画も多く描いている。／国政時代には「東京十二景」，「東京写真名所一覧」，「東京開化名景競」，「東京尾張街繁栄之図」，「東京銀座煉瓦石造繁栄之図」などの3枚続がある。蒸気機関車を何枚も描いて開化絵に積極的であった。その他，役者の似顔絵，博覧会図，版本，新聞挿絵なども手がけている。大正9年10月26日死去。享年73。［https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%AD%8C%E5%B7%9D%E5%9B%BD%E8%B2%9E_(3%E4%BB%A3%E7%9B%AE)］

因みに，版元は南槙町［日本橋］，伊勢屋兼吉［http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/collections/search_result.do?division=collections&class=nishikie&type=publisher&ikana=%E3%81%84%E3%81%9B%E3%82%84+%E3%81%8B%E3%81%AD%E3%81%8D%E3%81%A1&ititle=%E4%BC%8A%E5%8B%A2%E5%B1%8B+%E5%85%BC%E5%90%89&istart=0&iselect=%E3%81%84&rid=5000143&pid=1&trace=refine&trace=result&rpid=all&lstart=30］

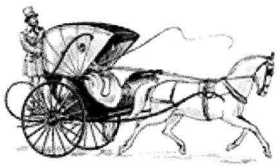
カドの帝国の大首都の方向へ歩を進めている。西に転ずれば富士山が約13000フィートの高さまで聳え立ち，そのこちら側には顰め面をした尖った暗い岡々の塊があり，富士の眼も眩む雪の山腹にくっきりとシルエットを刻んでいる。それらは東京の北，遥か薄青いかなたに浮かび上がる長く険しい山脈の終わりをなす。

Unloading a Rice Junk. a Japanese Artist.

先へ目を向けてみよう，どちらを行っても低地の日本人町と崖［山手］を結ぶのだが，急な石段を下るか，勾配の急な道路のひとつをよろめき下って，通りと，そこでとても忙しなく動き回る人々を覗いて見よう。というのは，日本人は，のらくら者はほとんど見られない。誰でも，少なくとも見かけ上は，生計をたてるべき手段として何らかの手職を持っている。間違いなく，ここ横浜でさえ数年前には目にしたような，文明の洗練を受けていない日本人を目にすることは無いだろうし，また，帝国のほとんどどこででも，今や目の当たりにするとは考えられない――それほどに，かつて大いに恐れられた「黒船」と，それがもたらした知識と商品の影響は，良かれ悪しかれ大きかったのだ。

恐らく，新参者が，完全に日本的だなァ，と心を打たれるのは，人力車つまり「マンパワー車」だ。それは一種の小型ハンソム［一頭立て二輪馬車］[13]で，二人または三人乗で，一人あるいは二人の男が前後に並んで引く

13



［https://www.google.co.jp/search?q=%E3%83%8F%E3%83%B3%E3%82%BD%E3%83%A0%E9%A6%AC%E8%BB%8A&hl=ja&rlz=1T4GGLL_jaJP393JP394&tbm=isch&tbo=u&source=univ&sa=X&ved=0ahUKEwjHv5aM4cHJAhXBGZQKHRbHC7MQsAQIKA&biw=1344&bih=693&dpr=1.25#imgrc=Co2UV38ducRZAM%3A］

のだが[14]，移動手段としてはそう悪いものではないと分かる ── ただし，もしもスプリングが利いて，道路が我慢できる状態ならば，だが。私はこのやり方で，そして可及的速やかに，約500マイルの旅を続けた。例のささやかな「プルマン車」[15] ── お道化てこう呼ばれていた ── は誰もが利用し，国中どこにでも見かけ，また実際，中国やインドの或る港にさえ在った。しかし，人力車は「外人」がやって来るまでは無かったので，巷では横浜のアメリカ人によって発明されたと言われていたが，アメリカ人がこんなことをするなどと到底信じ難い。昔馴染みの神輿（mi-koshi），つまり神聖な車から思いついて，一層現代的な軽便な乗り物へと最初に推移したことを示しているのが，何枚もの写真で分かる。確かなことだが，初めは極めて体裁の悪い原始的な種類の乗り物で ── このように改善が加えられてきてさえ ──，いかなる類のスプリングも無かった。しかし，恐らく，そのアメリカ人の「発明家」はスプリングのことを何も知らなかったのだろう。車体は塗料か漆で華やかに仕上げてあり，日本の神話や伝説，芝居から題材を取った悲劇で装飾したものも度々見かける。雨天には，ほとんど裂くことができないほど丈夫で，酷い臭いのする油紙の幌が，お客さん（乗客（hire）は上品にこう呼ばれる）の上にかけられるが，明かりや通気のための開口部も無いのだ。その上，事によったら客が望むのとは全く反対方向に引いていく（trundelled）が，しかし，誰一人としてそんな時

14

［二人乗りの人力車で二人が引き一人が押すという，三人がかりの贅沢。明治中期の撮影 ── http://lib.ouj.ac.jp/koshashin/jinrikisha2.html］

15 プルマンつまり「人が引く」という英語の語義と贅沢な設備のある客車特に寝台車両を指す鉄道の「プルマン式車両」をかけた駄洒落。鉄道車両制作のプルマン社はジョージ・モーティマー・プルマン（George Mortimer Pullman 1831–97，アメリカ人プルマン社の考案者）が1867年に設立した会社。

でも慌てはしない。間違いなく車夫(coolie)たちが慌てふためくということはほとんどない ── それが如何に時間の浪費であれだ。

鉄道の起点である東京ターミナルへの途上 ── ステーション［ステイション，ステン所(ショ)］という言葉は今やほとんど日本語になっている ──，比較的立派な建物群を通り過ぎるが，これらは一般に軟質の容易に刻んで造れる薄緑や大理石模様の凝灰岩(tuff)で建てられている。これには粉飾的な塗装をしなくても見栄えがするし，長期的な耐火性があるという二重の利点がある ── あゝ！だが，十分永いということは滅多にないのだ。あの木造の古き日本の町にあれほどありふれた恐ろしく普遍的な大火災に耐えるほどには。この溶岩(lava)石もまた，私が思うに，その脆(もろ)そうな構造から危惧されるより，ゆっくりとではあるが風化するようで，様々な変化が見られる。主に海面下の，かつて実際そうであったことが分かっているのだが，潮流により低位の土地が水面下になり，北方への潮流からの，軽石の塊の堆積から形成されたと考えられている。

終わりに，あなたが雇った職務中(in harness)の二足歩行者(biped)は，政府発行の薄汚れ，うまく偽造したみすぼらしい証書を差し出す ── それは正規料金のほんの二倍だ ──，それから，どうにも訳の分からない悪態を延々と喚(わめ)き続けるが，あなたは落ち着き払って，汽車切符や座席の確保に急ぐ群衆を眺めやるしかない。じめじめして肌寒い日には，たいていの場合高級紳士服用黒ラシャ(プロードクロース)製の短い布のケープか小さなチェックの毛織のショールを羽織る。他方，倹(つま)しい階層の者は，編んだ広葉の草や尖った先を外へ，また下へ突き出した藺草(いぐさ)の背(ティベット)蓑を纏(まと)って雨を避けるが，これは相当役立つものだ。とても奇妙なことに，同種の草製のコートがスペインのミーニョ地方[16]で着られているが，しかし，このいかにも原始的に見える衣類が日本で長い間，蓑(mino)と呼ばれてき

16　ミーニョ（ガリシア語：Miño，スペイン語：Miño，ポルトガル語：Minho）は，スペイン北西部の地方で，ポルトガルとの国境に接する。著者は，「ミーニョ」という音韻と「みの」との類似性を言いたいらしい（?!）。
［参考］蓑の語源・由来 ──「み」が体の「身」であると思われるが，「の」については特定が難しい。／代表的な語源説には，「ミニ（身担）」や「ミニ（身荷）」

たというのはいかなる説明も必要としない紛れもない事実だ。

旅人の多くもやはり油紙の防水着［紙合羽］を羽織る――色は黒か暗緑色，さもなければ天然のくすんだ黄褐色だ。同時に，彼らはほとんどが重くて不格好な紙の傘をさしている――派手に彩られ，しばしばその張られた紙に象徴的なデザイン（紋）を描き込む。それらは，国の敬愛する従弟妹たちに贈るにぴったりの土産なのだが，ただし旅行中は何事につけてもあまり過信してはいけない。かつて私は英領ブータン（Bhootan）渓谷を旅行中，見たところとても目先の利いた似たような品物を値切って手に入れたが，しかしそれらは皆グラスゴウで作られたのに気付いた――そこへまさに送り出そうとしていたのに！

老若男女，皆が極めてびっちりした藍色か白色の綿靴下［足袋］を，ブーツのように横で留め金［小鉤］で留めて，親指を他の四指と離して履くのは，百姓，職人，貧しい人が履く草履・わらじや暮らし向きの良い階層が履いてぎこちなくカタカタ音を立ててる丈の高い（high-toothed）木靴（wooden）［下駄（pattens）］の鼻緒をしっかり捕まえるためだ。色々の形式があって，故国の木靴（clogs）に似たものもあり，それどころか優美なデザインの漆塗りのものもある。到着した汽車から現れ出た木板を履（wood-shod）いた通行人の騒々しい足音が，通過する騎兵隊連隊を思い起こさせる。それとは別に，より甘味な連想が時に思い出されるようだ。私は，ため息をつく色男（swain）の心は，崇める人の愛（いと）しの小さいあんよ（tootsicums）が小道を「ピタパタ，ピタパタ」とやって来ると歓喜に飛び上がらんばかりになるというあるラブソングを思い出した。この詩人は純真な想像力の持ち主だと思う。

ほんの稀に，今（1873）では滅多に見られないが，しょぼくれた陰気なサムライ，つまり二本差しで，金盥型（かなだらい）の帽子［饅頭笠］を被った騎士を目にするかもしれない。絹の帯から鋭く剃刀のような刃（やいば）の重々しく豪華に飾った柄を突き出し，それに加えて，もう一振りをほとんど小太刀のように交差

「ミニ（身布）」の転，「ミニナフ（身荷）」や「ミオホ（身覆）」の意味，「ミノカサ（身笠）」の下略など［が］ある。／「み」を「身」としない説には，蓑を着た姿と巻貝のミナ（カワニナ）の形がよく似ていることから，「ミナ」を語源とする説もある。[http://gogen-allguide.com/mi/mino.html]

させて身に着けている。それは世が世ならばそれで主君(lord)の名誉を守るべく具えていたものだったのだが，それだけでなく彼は真剣ではあるが，私たち西洋人にとっては極めて奇妙な仕方で，今ですら瞬時にして自分の名誉を守るために具えているのだ。こういう輩の多くは概して浅はかではあるが，多くの点で教養があり，高貴かつ高潔な人たちだ。彼らはその拠り所とする，かつては多くの戦いで刃毀(はこぼ)れし湾曲してきた武器を，しかるべき冷血の骨董漁りに，譲り渡すために自ら持ち込むに至るまで，耐え続けなければならなかったのだ。日本以外でこの無念の観念を理解する者はほとんどいない。ついこの間までの日本の封建時代のこの騎士たちは，ほとんどが他の路に活路を求め，進んで公務員として雇われ，あるいはしばしば早まって，乏しい貯えをもって卑しい商売へと走っている。未開拓の鉱脈は未来のウォルター・スコット[17]としてここに実在している ── この散文的な我らが 19 世紀にいまだ生きる封建的な中世騎士物語の武勇伝の蘊蓄(うんちく)よ！

明らかに移行期である今の人々の服装は極めて楽しめるし含蓄もある。東洋と西洋の観念の最も独創的な組み合わせは私たちの歩みの数ヤード毎に起こっている ── 普通，壮麗絵の如し，はたまた楽しみの素，というより以上に目を見張るものがある。かくて，知的な男が ── 恐らく商館の事務員か何か ── がパリかロンドンから取り寄せたフェルトの帽子を被(かぶ)り，日本古来の絹の着物を着，極めて高歯の足駄(あしだ)［パッテン］[18]を履き，普通のバスタオルを毛糸の長い襟巻(comforter)き代わりに首に巻いている姿を見かけるかもしれない。もしも金ぴかの値段票が残ってでもいたら，ますます結構な飾りになったことだろう！

私がこうして書いている時代では，欧風の「燕尾服(claw-hammer coat)」，白いキッドの手

---

[17] Sir Walter Scott, 1st Baronet 1771-1832 ── スコットランドの小説家・詩人。作品 ── *The Lady of the lake*（1810）［『湖上の美人』］，*Waverley*（1814）［歴史小説『ウェイヴァリー』］，*Ivanhoe*（1819）［『アイヴァンホー』］，等多数。

[18] Wooden-pattens：泥道などをあるくためや，背を高く見せるために木底やコルクなどをつけた靴

袋を身に着け，足には下駄という盛装で，晩餐に出かける高官を見かけることは全然珍しいことではなかった。また，貫禄も風采も全く立派な市民が，暑い日に，最新の欧風の既製服(store-clothes)を着て，下肢は涼し気な白木綿の下着［股引・すててこ］── これは普通，公衆の面前では見えるようにはなっていない ── を履いているだけの格好で首都の街並みをぶらぶらしているのに出くわすかもしれない。色いろと変化に富んだ服装は職業や専門を示す目印である傾向があって，面白い見物(みもの)だったが，ここで進行しているのは，まさに私たち英国の色々な時代の鬘(wig)が，まるで化石のように，例えば，特定の公的役職が起源を持つ諸成層を示しているのと同じ過程なのだ。下級役人は西洋スタイルの帽子を好み，水夫はイギリスの水夫と同じように装い，工部大学校の学生はスコットランド風の縁無帽(ボンネット)［グレンガリー］[19]を被り，他方，［東京］大学医学部学生[20]はあのきちんとした紺色の帽子(キャップ)を被るが，これは我が国の旅回りのドイツ人音楽団(バンド)たちの頭蓋を飾るものだ[21]。

---

19 幼稚園帽子のような三角の上を折ったもので，頂上に丸い玉がついたお釜帽子で，額に桜の中に「工」の字をつけた徽章がついていた。［www.geocities.jp/irisio/bakumatu/ice/ice_whatisice.htm］

［http://www.google.co.jp/url?sa=i&rct=j&q=&esrc=s&source=images&cd=&cad=rja&uact=8&ved=0ahUKEwjn2_W-2crQAhXLULwKHc2rDW8QjB0lBg&url=http%3A%2F%2Fwww.geocities.co.jp%2FStylish%2F4051%2Fgunyou.html&psig=AFQjCNH64LYlVfQxyYzzkTmMLda0oS3LNQ&ust=1480396657100276］

20 現東京大学医学部はフォールが来日して間もない1874（明治7）年5月，第一大学区医学校から東京医学校に改称。1877年，東京医学校は東京開成学校と合併して東京大学医学部になった。さらに1886年に帝国大学医科大学と改称された。つまり，フォールズの来日時は東京医学校，離日時は東京大学医学部，本書出版時は帝国大学医科大学と名前が変わっている。

21 明治政府は近代医学の導入に当たり，ドイツ医学の採用を決め，教授としてドイツ人を招聘した。頂点に立つ現東大医学部は完全にドイツ医学で教育され，官立医学部（東大のみが唯一の官立医学校だった）卒業生が3名以上教授陣にいることが甲種医学校として認められる条件であった。つまり全国の医学教育はドイツ医学で進められた。医学生はドイツ式教育を受けていた。

田夫野人ないし地方の商店主が最も特徴的な様子をしており，訪問者にとっては最も興味深い。彼らは町の居住者に比べて身体が著しく劣るように感じられた ── この印象は，曲がった腰や草鞋履きでは，完全には説明できないものだ。降っても照っても，田舎者は ── 常に至るところ都市の己惚れ屋の獲物だ ── 古びて見える，1ヤードかそこらの差し渡しの椰子の葉の帽子を被り，湿った日には，上述した奇妙な草のコート［蓑］に身を隠すと彼らはまるでヤマアラシだ。田舎の女性は，目を見張るほどの美人はいないのだが，通りがかりの外来の南蛮人たちを見据え，大きく口を開けてニッカニカと笑う時に最も見栄えするということはまずない ── 特に結婚後然るべくお歯黒で歯を染めているときは一層だ。彼女らは薄青の模様のある手巾［藍染手拭い］を被り，ごろごろした結び目で頭の周りに留める。若い娘たちは真紅やその他の明るい色の腰布を好む。

そうした倹しく善良な野良の働き手は2,000万人くらいいるのではないかと思うのだが，文明はゆっくりと，しかし確実に彼らのもとに達しつつある。この素朴な人たちが，列車の脇に歩哨に立っているように見える，金モールをつけた車掌に，思い切って車内に入る前に深々とお辞儀をしているのに気が付くと奇妙な気がする。時々，田舎者の旅行者が下駄を脱いで外のプラットホーム上に残すことがあるが，それは家に入る時に礼儀正しくそうするのを習慣としていたままで，汽車が目的地に着くと下駄もそこにあると期待するかのようだった！

うまみのある仕事に群がる中に，相当数の金回りのいい清国人が見受けられるが，彼らはどうにかして，日本からあるいは日本への金銭の流れの大半を取り扱っている。その金銭は，世界漫遊中の，結構うまいことやっている英米の男女の「洒落者」たちの落とすものだ。また，少なからぬ数の外見は頭がよさそうで，エレガントに着こなした日本人が，ちょっと大きすぎる金鎖を着け，ヨーロッパの文明の資源を堪能し尽くし，あらゆる哲学，科学，宗教を習得し，今や同朋に向かって，恐らく，何を信じるべきかを説いてい

る――いやしくも，何か信ずるものがあるとすればだが。

ヘンリー・フォールズ（2）

フォールズの日本上陸の前年1873（明治6）年，スコットランドでは，人々はこの年アフリカの医療と伝道に従事しつつ5月1日亡くなったデイヴィッド・リヴィングストン（David Livingstone, 1813-1873）の死を悲しみ，またその業績を讃えて止むことはなく，医療伝道の機運は高まっていた。その前年には，一致長老教会の海外伝道委員会（Foreign Mission Committee）は医療伝道のために72人の献金者から8,949ポンド15シリングを受け，充分な資金が用意されていた。

1873年7月29日，エディンバラのクィーン・ストリート・ホールにおいて，スコットランドから初めて日本伝道に向かう一致長老会教会のフォールズ（1843-1930）とデイヴィドスン師（Rev. Robert Young Davidson, 1846-1909）それに超宗派のエディンバラ医療宣教会が派遣するT・Aパーム（Theobald Adrian Palm, 1848-1928）の3人の壮行会が開かれた。30歳，27歳，25歳の若い彼らはまだ文明開化途上にある異教徒の国，日本での仕事として科学と医療そしてキリスト教を伝えることに夢をかけていた。英語名を見て分かるようにデイヴィドスンは按手礼を受けた聖職者であるが，フォールズとパームは牧師の資格はなく，宣教医（医療宣教師）である。共にリスターのフェノール消毒法を学んだ二人の医師は，それぞれ東洋に向けて発つ直前に結婚し，フォールズ夫妻とデイヴィドスンは3月に，パーム夫妻は5月に日本に到着した。また6月にはワデル師（Rev. Hugh Wadell, 1840-1901）も新婚の妻を伴い日本に上陸，スコットランドから派遣されたメンバーが顔を揃えた。［高畑美代子記］

（ながお・しろう　名誉教授）
（たかはた・みよこ　英学史研究家）